

石橋に築かれた平安時代の村

石橋遺跡発掘調査現地説明会資料
令和3年8月21日(土)
八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

1. 石橋遺跡とは

遺跡は新井田川右岸の標高約60~70mの丘の上に立地しています。これまでの調査から遺跡の南側斜面で平安時代の竪穴建物跡が多く見つかり、集落が形成されていたと考えられます。さらに、遺跡南側の斜面には坂中遺跡・市子林遺跡が広がっており、同時期の遺構・遺物が見つかり、

2. 調査成果

発掘調査は令和元年度から3カ年の計画で行われており、最終年度の今回は約1,500㎡の範囲を調査しています。

竪穴建物跡(令和3年度)

竪穴建物跡は15棟見つかリ、いずれも平安時代のもので

第30号竪穴建物跡は、一辺が約10mの大型の竪穴建物跡です。八戸の古代のもので最大級と考えられます。北西側にカマドをもち、長さ約3m、半地下式で外側へ上昇する煙道が作られていました。柱の穴は深さ1m前後のしっかりとしたものが4つ見つかりました。また、床面の下からカマドの跡が検出し、古い建物を拡張したことがわかりました。



第30号竪穴建物跡 検出状況(上が北西)
○ 柱穴

竪穴建物跡に捨てられた貝

第32号竪穴建物跡からは食糧にされたと思われる貝が大量に見つかりました。その多くがホッキガイやイガイの仲間といった岩礁生の貝で、近くの海でとっていたと考えられます。中には、アワビやウニとみられるものもわずかに含まれていました。また、カマドの灰の中からは、魚の骨も見つかったことから、この集落で暮らした人びとは魚介類も好んで食べていたのでしょう。



第32号竪穴建物跡 貝出土状況(南から)

焼けた竪穴建物

第33号竪穴建物跡は焼失しており、建物の構築材が炭となって多く残っていました。そのほかにも、木製の椀や、布または紐のような繊維製品も炭化して見つかりました。

また、この遺構はカマドも非常に良い状態で残されており、石を組んで作られた様子がよくわかるほか、カマドの中からは動物のものとみられる骨も見つかりました。



木製椀出土状況(伏せた状態)



出土した繊維製品

鉄製品の利用

石橋遺跡では、食器や煮炊きの道具である土師器と呼ばれる土器、貯蔵などに使われた須恵器と呼ばれる丈夫な土器、砥石などの石器といった道具類のほか、鉄の道具もたくさん見つかりました。武器又は狩猟のための鉄鏃、木の伐採や加工のための鉄斧、鎌や手鎌といった農耕具、刀子や紡錘車などの生活用具、バックルとみられるもの、鎧の吊り金具(馬具)など多種多様なものがあります。

令和2年度の調査成果

昨年度調査をした第21号竪穴建物跡と第22号竪穴建物跡の中から鍛冶炉の跡が見つかりました。そのほかにも、金床石やふいごの羽口、鍛冶作業を行なった際に出る鉄の不純物など、鉄製品の生産や加工が行われていたことがわかる資料がたくさん出土しました。

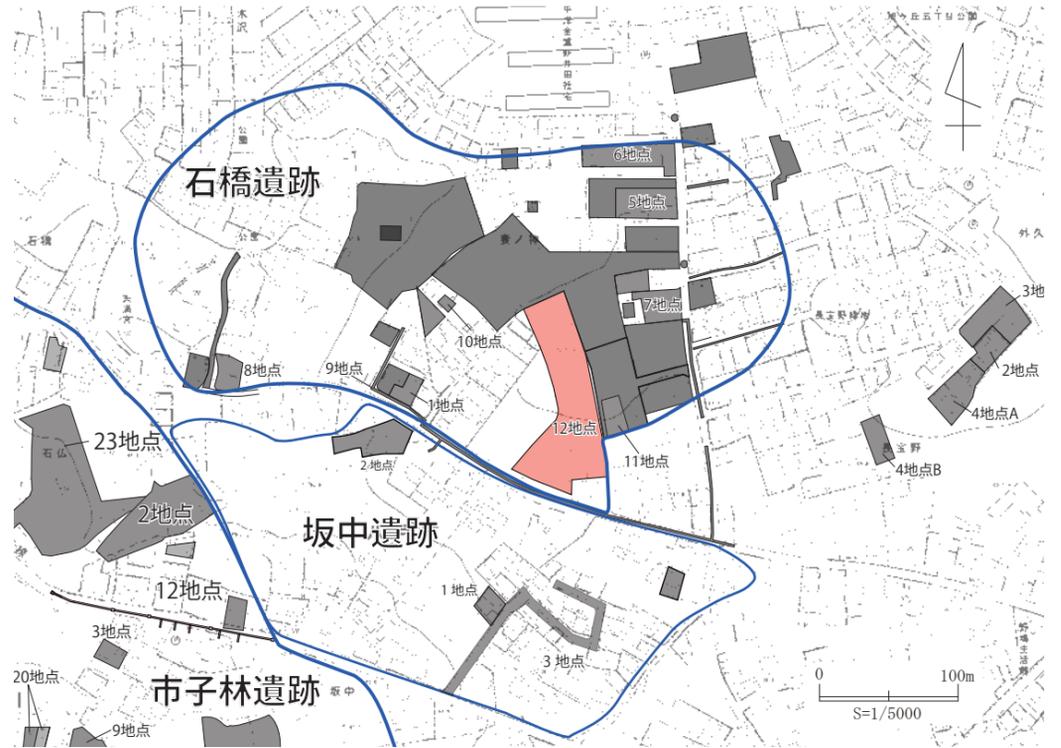
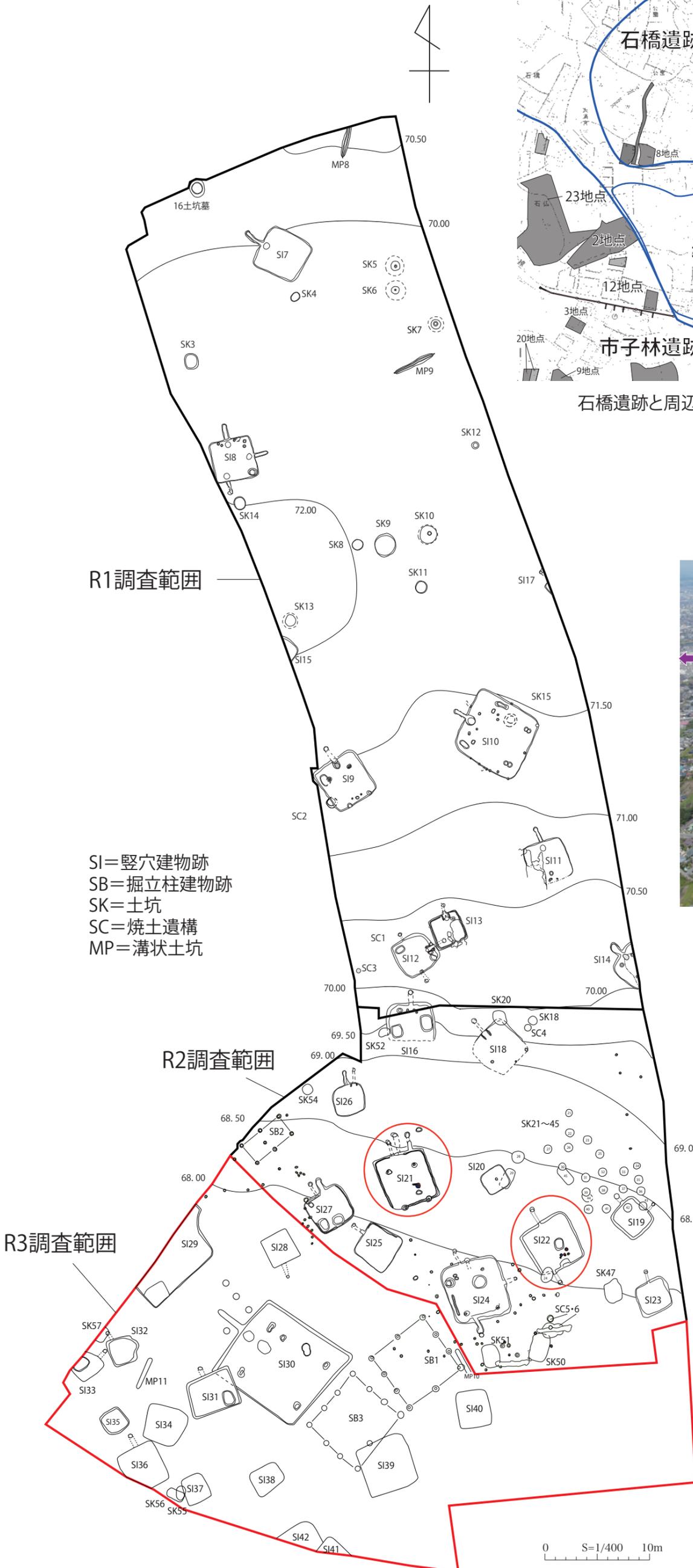


第21号竪穴建物から見つかった鍛冶炉跡(北東から) ○ 鍛冶炉範囲

3. まとめ

この集落は、一辺が約3m~10mと様々な規模の竪穴建物や掘立柱建物で構成されており、ほとんどの竪穴建物跡で、北西方向にカマドが作られているということが特徴です。中には、同方向や東側、南側にカマドの作り替えが行われたものもあります。また、遺跡の南側へ下るにつれ遺構の分布密度が非常に高くなっています。大型の竪穴建物跡(第30号竪穴建物跡)を中心として、集落が築かれたと考えられます。

石橋遺跡第12地点遺構配置図



石橋遺跡と周辺の遺跡

- 第12地点(令和元年度～令和3年度調査)
- 過去の調査地点



空から見た石橋遺跡(南から)

○ 鍛冶炉が見つかった竪穴建物跡

令和元年度～3年度の調査で検出した遺構

- 縄文時代
- ・土坑: 5基
 - ・溝状土坑: 4基
 - ・焼土遺構: 2基

- 平安時代
- ・竪穴建物跡: 36棟
 - ・掘立柱建物跡: 4棟
 - ・土坑: 6基
 - ・焼土遺構:

- 近世以降
- ・土坑: 21基
 - ・土坑墓: 4基